

耳のお話

-2018・7・20-

夜風が待ち遠しい七月半ばの神楽坂です。坂の途中にある赤城神社では、境内に祭られている八耳神社の祭礼を迎え、笛の音が聞こえてきます。八耳神社は耳の神様だそうで、10 人の話を一時に聴くことができたという伝説の持ち主、聖徳太子をお祀りしています。

耳は身体の中では地味ですが、情報を知る大切な手段“聞く”ことを一手に担っています。美しい調べや風の音など耳の働きが無ければ愉しむことはできません。勿論、不快な音は聞かずに越したことはありませんが。

音は空気や水が細かく振動することで発生します。耳で聴きとれる音を音波、振動が速すぎて聞き取れない高音を超音波、逆にゆっくり過ぎて聴くことができない低音を低周波といいます。音波は耳の孔（外耳道）を通して鼓膜を振動させ、鼓膜に付属している3つの骨を経由して内耳へと伝えられ、最終的に有毛細胞と呼ばれる感覚受容細胞が振動を音として感じ取っているのです。耳にはもう一つ大切な働きが



あります。私達の身体が重力や速度を感じるバランス感覚、いわゆる平衡感覚を耳は司っています。ザックリとご説明すれば、これは耳の前庭と呼ばれる場所にあるリンパ液のたっぷり入った2つの袋に内蔵されている平衡石と呼ばれる小さな石が付属している有毛細胞の感覚毛を押して頭が傾いているのか、水平なのかを伝えています。また、速さを感じとるのは三半規管です。三半規管の中もリンパ液に満たされています。そしてスピードがかかれば、三半規管の中のリンパ液は慣性の法則に従って、加速度のかかる方向とは逆向きに流れます。この流れを三半規管の中にある有毛細胞が感じ取り、速さを感じる感覚が生まれます。つまり、内耳にある聴覚と平衡感覚は、リンパ液の動きや振動を有毛細胞が感じることで生まれているのですね。こうして耳のことを知ると、耳も決して疎かにできない器官なのだ実感できます。身体は無駄なく、巧妙に仕組みを作り出し、それを有効に活用していることが耳という一つの器官を大まかに知るだけでもよくわかります。

耳の働きが多岐に渡りますので、耳に関わる病気も多様です。子供たちが罹りやすい急性中耳炎、40～50 代の大人にみられる治癒が難しく不快な症状が継続する難治性中耳炎、めまいや耳鳴りが続くメニエル病など挙げればきりが無いほどです。もし耳の機能に不安があれば、聴覚が失われることさえありますので、自己判断で放置せずに専門のドクターにご相談ください。

日々、社会で他者と暮らす私達は、できるだけ耳に心地よい言葉を紡ぎ出す努力をし、せめてひと様の耳を汚さずにおきたいものです。
※今回の原稿は札幌医科大学當瀬規嗣教授の「生理学」を参考にさせていただきました。